
マジカルエースさつき

結城稜汰

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

マジカルエースさつき

【Nコード】

N6802H

【作者名】

結城稜汰

【あらすじ】

張摩沢に住む「結野五月」はいつもと同じように学校にかよっていた。だがそこでなんと事件に巻き込まれる。急に魔法使いになれと言われたのだ。仲間と共にさつきは戦う！

お話の始まり

これは、結野 五月に起こったとある事件。まさか普通の小学校4年生の私に魔法が使えるなんて思っても見なかった。そう始まりは春休みの登校日、あの日から私の人生は大きく変わった。

ジリリリリ。目覚まし時計が朝の7時をさしながらその役目を果たしている。

すると、小さな女の子の手が目覚まし時計の方へ伸びてゆく。

「ふぁー。もう朝か。」

そういいながら彼女は部屋のカーテンを勢いよく開けた。

「んーいい気持ち、今日もいい天気」

彼女の名前は結野 五月（ゆうのさつき）隣の神楽坂小学校に通う4年生。今日は初の登校日で、クラス分けの発表の日でもある。

「また茜ちゃんや淳くんと一緒にいいな」

独り言を言っていると下から声がした。

「おーいさつきご飯できたぞ」

「はーいすぐ行きまーす」

今の声は結野 睦月（ゆうのむつき）。今年から神楽坂小学校の隣にある神楽坂高校の一年生になる。両親のいない結野家を支えて頼りになるさつきの兄だ。

「おはようお兄ちゃん」

「ああ、おはよう」

結野家の父母は共に海外で働いていてあまり会えないらしい。

「今日もバイトなの？昨日も夜遅かったみたいけど…」

「大丈夫だってそれより今日登校日だろ、時間大丈夫なのかよ」

そういつて時計を指差す。

「えー、もうこんな時間。じゃ、じゃあバイトがんばってね。いつてきまーす」

そう言つて慌てて玄關の扉を開ける。

「さつき、持ってけ。体もたないぞ」

「ありがとう」

睦月がくれた食パンを食べながら駅まで自転車のペダルを全速力で漕ぐ。

ここ張摩沢村は人口1500人ほどの小さな村。田んぼや畑の間の道を慣れた様子で進んで行く。途中で近所のおばあちゃんやおじいちゃんに挨拶しながら、ようやく張摩沢駅に着いた。

この駅は30分に一本しか電車が来ないので遅れると命取りになる。自転車を駅においてちょうど入ってきた電車に滑り込むようにして乗った。電車はすぐに発進した。

「おはようです さつきちゃん。今日も朝からお元気ですね」

そう言つて声をかけてきたのは、さつきの去年のクラスメイト大河内 茜（おおこうちあかね）。とつても仲良しの幼馴染でもある。

「おはよう茜ちゃん。今日も早いね」

「お互い様ですよさつきちゃん」

いつも笑顔がまぶしい可愛い女の子だ。

「次は、船岡山、船岡山です」

駅員のアナウンスが狭い車内に響きわたる。

「あら、淳也くんです」

「本当だ。おーい淳くん」

今入ってきた男の子は椎名 淳也（しいなじゅんや）こちらもさつきと幼馴染みの仲良し。だが、少し元気がない。

「おはよう」

「ああ、おはよう」

「どうしましたか？元氣ありませんけど」

「い、いや、別になんでも」

少し慌てて返事をする。

「でも元氣ないよ大丈夫？」

「本当に大丈夫だって、そんなことよりお前見ないうちに太ったか

？」

「ふえ？ふ、太ってなんかないもん」

「本当か腹の辺りが苦しそうだぞ」

「もう淳くんのいじわる。心配して損した」

「ふふ、いつもの淳也くんですね。」

この大河内家と椎名家、そして結野家は昔から張摩沢の主護三家らしい。だからこんな田舎の村からはるばる隣の小学校まで通っているわけで…。まあ話すと長くなりそうなのでまた次の機会に。

春休みのことを話していると電車は終点宮園駅へ到着した。ここから神楽坂小学校までは徒歩でいくしかない。

「はあ相変わらず学校まで遠いな」

「仕方ないですよ家柄も家柄ですし」

「そうだな、でも世の中には学校に行けなくて困っている人たちも大勢いるからな」

そう言った淳也の顔はまた暗くなった。しかし、今度は密かに笑みをこぼした。

「そうだよね、こんな事言っちゃダメだよね」

「ぶははは」

ついに淳也が笑い出した。

「うふふ」

つられて茜も笑い出す。

「どうしたの？二人とも」

「いや、さつきがあまりにもうまく落ち込むもんだから」

「本当です」

二人はまた笑い出した。

さつきは頬を赤らめて、

「もう、二人ともいい加減にしてよ」

平凡な小学生にはよくある普通の会話をしながら歩いていると、ようやく学校の校門坂にたどり着いた。茜が口を開いた。

「葉月さまと水無月さまは春休みこちらにお戻りになられましたか

「？」

「ううん、なんか仕事のほうが忙しいみたいで帰ってきてないの」
外国で仕事しているというさつきの両親の名前は結野 葉月と水
無月（はづきとみなづき）

水無月と淳也のお母さんである椎名 麻衣（しいなまい）はこれま
た幼馴染である。

「そうなんですか。そうだ今日家に遊びに来てくださいな」

これまた突然なお誘いである。だが、特に予定もないので、さつ
きは

「うん、じゃあ今日の放課後一度家に帰ってから行くよ」と言った。

「おい予鈴なってるぞ、急げ」

そして三人は校門坂を全速力で駆け上がった。

あつという間の時間

「ふぁーやつと終わった」

淳也が伸びをしながらいった。

「別に今日はHRだけだったからそんなに長くなかったじゃないかな？」

「そうですね、でも気持ち悪いほどに三人そろったな？」

淳也の言うとおり4年連続で三人が同じクラスになった。これは運命としか言いようがない。

「気持ち悪いって、私と同じクラスがそんなに嫌なのですか？ 淳也くんひどいです」

茜が涙目で言った。知らない人が見ればどこからどう見ても淳也が泣かせたみたいになっている。こういうことに関しては病的にうまい。おそらくニューヨークのスラム街に置いてきても一人で生活していけるだろう。

「悪かったよ茜そろそろやめてくれないか、周りの目が気になる」早くも残っていた生徒の中では小さな騒ぎになっていた。

ペロツと茜が舌を出した。

「そうだ今日淳也君も一緒に私の家に来ませんか？ いいですよねさつきちゃん」

「うん！ 淳君も一緒に行こうよ！」

「悪い、最近忙しいから。今日も…ちよつとな」
淳也は少し残念そうだ。

「そうなんだじゃあ仕方ないね」

二人も残念そうに顔を見合わせる。

「じゃあ帰るか」

「バイバイ淳君また新学期に会おうね」

「ああまたな」

淳也が肩越しに手を振って去っていく。閉まるドア越しに見えるその背中はどこか小さく見えた。

「淳也くん疲れてましたね」

「うん」

二人は淳也がなぜ疲れているのか分かったがあえて聞かなかった。おそらく店のほうが忙しいのであろう。

店というのは、おもちゃ屋で淳也の両親がやっている。規模はかなり大きいらしく何でも全国に店舗があるとかないとか。二人もよくイベントがあるたびに遊びに行かしてもらった。

「今度手伝いに行つてあげようか？おじさんとおばさんにも結構お世話になっていたから」

「それはいい考えですよさつきちゃん。きっと淳也くんも喜びますよ」

満面の笑みで茜は答えた。きっと彼女も心配だったのであろう。

電車は無人の張摩沢に着いた。二人は降りて途中まででこぼこのあぜ道を一緒に帰った。さつきは自転車を押しながらだったので少し辛そうである。高い木の下まで来た。この木の名前は「（神清杉）」。この村の守り神とされている。見上げれば後ろに倒れそうなほど大きく、待ち合わせや、目印に使われることが多い。

「それじゃあ、かえって着替えたらずく行くね」

「はい、お待ちしています」

二人はそれぞれの家へと帰っていった。神清杉からさつきの家までは5分もかからない。さつきは急ぎ足で自分の家へと帰っていった。自分の家の青い屋根が見えた。自転車がないことから睦月はバイトに行っているのだろう。念のためインターホンを押してみる。

「ピンポン」

やはり誰もいない。仕方なくランドセルから家の鍵を取り出しドアを開けた。

「ただいま。…って誰もいないか」

当たり前である。

とぼとぼとリビングまで来ると大事なことに気づいた。

「あつ、お昼ご飯どうしよう。お兄ちゃん何も置いていつてくれないよ。はあー」

さつき自身料理はほどほどにできるのだが、睦月がいないときは火は使つてはいけないことになっているのだ。

「仕方がないので茜ちゃんの家でご馳走になるか」

睦月宛てに書置きを残していった。――（茜ちゃんの家に行つてきます。お昼ごはんは茜ちゃんの家で食べるのでいらないです）

「よしこれで大丈夫。」

そう言つて紙を机の上に置いた。

ランドセルをソファーの上に置き、駆け足で玄関へ向かった。

「あつ、忘れ物、忘れ物」

履きかけていた靴を脱ぎ自分の部屋へ向かった。以前茜に借りていた本をとりに行ったのだ。机の上にあつた本を取り、そばにかつていた手提げかばんの中に入れた。もう一度靴を履きドアを開けた。そしてきちつと鍵を閉めた。

家を出て神清杉とは逆方向に歩き出した。一度神清杉まで戻るより、山の間を抜けていったほうが早いのだ。

このあたりについては知りつくしている。

しばらく歩いてみると、まるでヨーロッパのお姫様が出てきそうなお屋敷が見えてきた。そうあれが大河内の家なのだ。

実際のところさつきの実家もこれと同じくらいの広さがあるのだが、水無月が二人ですむには大きすぎると言うので新しく家を購入し今に至る。事実さつきもあんなに大きな家より今の家のほうが気に入っているみたいだが…。

ふと田に目を向けてみると何かが動いている――何か小動物のような

ものが―。なんだろうと思ひ近づいてみる。その瞬間ものすごい突風がさつきを襲った。気がつくとそのにいた何かはいなくなっていた。

ギィィ

門の中に入るとそこにはとてつもなく広い庭が広がっていた。ここはアマゾンの森林地帯かと思うほど、とにかく広い庭だった。

「お待ちしておりましたさつき様。お久しぶりですね。」

このとてもきれいな人は小中 麗子（こなかれいこ）さん。昔、結野家に仕えていた事もあるとても有能なメイドさんなのだ。

「お久しぶりです麗子さん。元気でしたか？」

「ええ、おかげさまで」

麗子はメイドというよりもさつき達のお姉さんといった感じで、昔は一緒によく遊んでもらっていた。

「どうぞこちらへ、中で茜様がお待ちです」

立ち止まって麗子が言った。

「あら、お早いですねさつきちゃん」

「いやーお昼ご飯抜いてきたから…。茜ちゃんはもう食べた？」

「いえこれから食べようと思っていたところです。よろしければ一緒にどうですか？ 久しぶりに麗子さんの料理食べてみたいのでは？」

そう言つて視線を麗子の方へ向けると、麗子は自信満々の笑みをこぼしていた。どうやら久しぶりにさつきに食べてもらうのがうれしいようだ。

「じゃあお願いしようかな？ 麗子さん」

「はい、任せてください」

威勢良く返事をするそのままキッチンの方へと消えていった。

「うふふ、きつとさつきちゃんが来てくれてとてもうれしいのですね」

「あはは…。でも麗子さんも大変だねあの喋り方。あつ、そうだから借りてた本、ありがとう」

手提げ袋から本を取り出すと茜に手渡した。

「いえいえ、どういたしまして」

立ち上がりながらそう言つと、すぐに本棚へなおした。この部屋がきれいなのは、こうして茜がすぐに物をなおす癖がついているからであろう。そうさつきが思っていると、下から麗子の呼ぶ声がした。
「茜様、さつき様お支度が整いましたよ。どうぞ降りてきてください」

「えっ！もうできたの、早すぎるよ」

さつきと茜の二人はすぐに、部屋を出て長い階段を下りて声のする方へといった。

「うわああ！…すごい。麗子さんあいかわらず料理うまいですね」

「さつちや…じゃなかったさつき様にそう言ってもらえるとてもうれしいです」

「今は誰もいませんから普通に話しても大丈夫ですよ」

笑みを浮かべて茜が言つと――

「そうね…」

そついうと急に麗子の顔から緊張が抜けた。

「いやーさつちゃん久しぶり。元気にしてた？いやー前と違ってここさ慣れるまでホント時間掛かつちゃって、最近ようやくまともなお料理が作れるようになってきたところなの。さあ、冷めないうちにどうぞ」

さつきまでの麗子とは別人だ。さつきと茜と淳也はこの麗子によく遊んでもらっていたのであった。

「そうなんだ。じゃあこの料理には期待してもいいよね。いただきます！」

「いただきます」

フォークで口の中にやわらかい肉を運んでいく。

すると口の中で溶けそうなほどやわらかく、とてもまろやかな味だ

った。

「うーん！とてもおいしいよ麗子さん！」

「やっぱり料理が上手ですね麗子さんは」

「本当？良かった、二人にそう言ってもらって。やっぱりこうでなくつちやさつちちゃんと再会したっていう実感が湧かないよ。あの喋り方どれだけしんどいことか」

麗子はともうれしそうだ。

「ねえ、茜ちゃん今日霞さんは？」

霞というのは大河内 霞（おおこうちかすみ）茜のお母さんである。ちなみにお父さんの名前は大河内 一二三（おおこうちひふみ）とつても気さくなおじ様で、現大河内家当主である。

「お母様は今日お仕事で遅くなるそうです」

「そうなんだ、よろしく言っというてね」

「まあ私が付いているから大丈夫なわけだ」

「うふふ、そうですね」

三人はとても楽しい時間を過ごした。昔の話をしたり。淳也の話をしたり。三人とも天使のような笑顔を浮かべている。だが、楽しい時間というものは皮肉なことにとっても早く過ぎていく。こればかりは神様に頼むほか仕方がない。もし時間を遅くすることができればノーベル賞確定だろう。

気が付けばもう外は太陽がその姿を山の間に隠そうとしていた。

「いつけない。暗くなる前に帰らなきゃ、お兄ちゃんが心配しちゃうよ」

「えーもう帰っちゃうの？ 残念。また遊びに来てね、絶対よ」

「うんまた来るね、いいでしょ茜ちゃん？」

「ええ、さつきちゃんがいいのであれば、いつでも」

さつきは立ち上がり、いすを机の中に入れた。そしてもってきた手提げかばんを手に取り、玄関へと向かった。

「暗くなってきましたしお送りいたしましょうか？」

麗子は近くに執事がいたのでメイドモード。

「うつん、大丈夫。走って帰るからすぐだよ」

「そうですかではお氣をつけて」

「それではまた遊びきてくださいな」

「うん、ありがとう麗子さんに茜ちゃん。じゃあバイバイ」

さつきは手を振りながら走り出した。

屋敷が見えなくなるとさすがにあたりはうす暗くなっていた。

「ふえーやっぱり送ってもらった方がよかったかな」

まだ6時にもなっていないというのに周りが細い山道だけにとても暗く感じられる。道に沿ってある街灯も今となっては火の玉の幽霊にしか見えない。

「は、早く帰ろう」

さつきはその足を速めた。

と、そのとき

（ガサガサ）

何かが茂みの中で動いた。

「え？今何か動いた？な…何だろう？」

茂みの中にさつきは入っていった。草を掻き分けて中をのぞいてみるとそこに何かがいた。

「この子…」

狐だろうか？いやそれにしては小さすぎるし可愛すぎる。むしろフレットのようなそんな動物だった。

そんなことよりもひどい怪我をしている。すごい血の量だ。

「早く手当てしないと…」

そついい終わらないうちにあるうことかどこからともなく声がした。

「ー良かったようやく通じた、近くに魔力のある人がなかなか通らなくてー」

「えっ！誰！？」

「ー君の目の前にいるだろうー」

「もしかして、あなた喋れるの？」

黄金色の毛並みをした小動物は

「ああ、まあ…色々…じ…事情があ…あつてな。そ…そんなこと…より今何時だ？」

と今度は苦しそくに答えた。

「えっ…えっともうすぐ6時になるかな」

さつきが腕時計を見て時間を知らせる。

「―すまないが少し手伝ってくれないか―」

小動物は口を動かさずにまるで、さつきの心に直接話しかけているみたいだった。

―（もしかしてテレパシー？）

「―ああそうだ。それに近いものだ。説明は後でちゃんとするから、言うとおりにしてくれないか―？」

「えっ？あつ！はい」

「―じゃあこれを―」

小動物は何とか立ち上がると、さつきに透き通るようにキラキラ光るとてもきれいな宝石のような石を渡した。

「これは！？」

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連「横書き」という考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n6802h/>

マジカルエースさつき

2010年10月18日23時38分発行